

動態統計からみたオオクチバスの現況

山根 猛・鶴飼広之（大津漁業協同組合）

琵琶湖の漁業は在来種の漁獲により生業として成立している。生産に負の影響を与えている可能性が極めて高い外来魚を駆除するために、1985年以降継続して駆除事業が進められてきた。滋賀県の報告（2015年）ではブルーギル・オオクチバスの推定生息量は、前者は995トンそして後者は245トンである。過去10年間に前者は1406トンから995トン、そして後者は377トンから245トンに減少している。これらを背景に、外来種の1985年以降の漁獲動態統計に基づいて現況について述べる。

資料には、1987～2016年の漁獲統計資料（水産課・大津漁協）を用いた。なお、公開資料の統計項目は2007年以降、外来魚はその他の魚類漁獲量（ C_m ）と合算して集計されているので、オオクチバスの漁獲量（ C ）はそれ以前のデータを基に最小二乗法により推定した。

1987年以降（ C ）に年変動は認められるものの1992年までは増加、以降減少に転じ、1994年から2000年までは50トン未満の低水準で推移した。一方、内訳は明確ではないものの（ C_m ）は、1987年から1989年にかけて増加し、1990年から減少に転じ、1991年以降急激に減少した。低水準に推移した期間の平均漁獲量は前者29トン、そして後者57トンであった。両者の減少期の平均変化率（ A_v ）を比較すれば後者は前者の1.4倍になる。2000年以降の増加期の（ A_v ）は前者の2.7倍になる。2013年以降データが少数ではあるものの両者とも増加傾向に転じている。見かけ上変動周期は約20年のようである。

いっぽう、滋賀県の本種の推定生息量は、2007年以降2013年までは減少傾向を示した後、微増に転じている。生息量が本種の漁獲にどのような影響を及ぼすかについては明言できないものの、2009年以降、刺し網・定置網での漁獲が全てであることから、上記期間の状況は各漁具の漁獲に反映する可能性が極めて高い。

大津漁協の魩の漁獲と全湖魩の漁獲を参考までに比較する。当該魩の漁獲量2007年以降2011年までは減少傾向を示し、2013年以降増加に転じている。魩そして全湖の漁獲変動パターンは似通っていた。

外来魚の生息量はブルーギルがオオクチバスより多く、前者の生息量は外来魚の77～80%を占める。前出の魩の漁獲量（外来魚）に占めるブルーギルの割合は過去20年間では80～90%になっていることから、生息量を反映する形で漁獲されていると言えよう。

1999年以降、漁獲（駆除）には様々な漁具・漁法が用いられてきた。近年では、刺し網・定置網（魩）が主要な漁法である。両漁法による漁獲量には差があるものの、2013年以降の漁獲量は基本的には増加傾向にある。1987～2006年の統計資料に基づき最小二乗法による推定値の変動パターンに魩の変動パターンが似通っていたことは興味深い。

ここで使用した統計データには様々なバイアスが存在するものの、2013年以降、本種は増加基調に転じた可能性が極めて高い。